

快適な北国の暮らしを実現するため、高速道路ネットワークの整備や安全・安心の道づくり、シーニックバイウェイ、道路環境の整備などさまざまな道づくりの取り組みがなされています。

一番身近なところにあり、社会生活に不可欠な社会資本である道路をもう一度、地域という立場から見直し、新しい関係を築いていく、そういった時代が来ています。今回は、それぞれの地域で特徴ある地域づくりを実践している方々に、「地域づくり」と「みちづくり」の新しい関係についてお話していただき、未来のみちづくり・地域づくりにつないでいきます。

## 地域が主役、後志・ニセコの再発見



### 大川 富雄 氏

シーニックバイウェイ北海道・支笏洞爺ニセコルート・ニセコ羊蹄エリア事務局  
NPO 法人 WAO ニセコ羊蹄再発見の会事務局  
シーニックバイウェイ北海道・支笏洞爺ニセコルート・キャンドルナイト実行委員会事務局

### インタビュアー

### 林 美香子 氏

フリーキャスター

### シーニックバイウェイとの出会い、WAOの立ち上げ

林 大川さんは、「WAOニセコ羊蹄再発見の会」や「シーニックバイウェイ北海道・支笏洞爺ニセコルート・ニセコ羊蹄エリア」の事務局などで、シーニックバイウェイの最初の立ち上がりから活動に関わってこられました。私もFM放送AIR-G'でシーニックバイウェイ活動を紹介する番組を担当していましたが、ニセコの皆さん方の活動ぶりはすごいですね。

今は知名度もずいぶん増していますが、大川さんは最初に「シーニックバイウェイ北海道」という言葉を聞いて、どんな印象をお持ちになりましたか。

大川 4年前ぐらいになりますか、講演会がニセコでありました。そのときは道路景観から地域を考えるとというイメージをよくつかめませんでした。

た。しかし、具体的な中身は分からなくても、地域おこしのきっかけとなる面白い活動になるのではないかという期待感を持ちました。

林 “シーニックバイウェイ”は、アメリカ合衆国で始まった活動。日本語に訳すと“景観のいい道”ということで、魅力ある美しい観光空間づくりなど、すごく多岐にわたる地域づくりの活動ですよね。その当時から大川さんは地域づくり活動をされていたのですか。

大川 いえ、この会の活動を始めるまでは、まちづくりや市民団体活動はしていませんでした。

林 本当にシーニックバイウェイ北海道への参加が地域づくり活動の第一歩だったのですか。

大川さんは、倶知安町で生まれ、大学卒業後、そのまま本州で就職、平成10年に戻られ、現在はニセコ運輸(有)にお勤めですが、今はもう地域づくりがお仕事のような感じですね。シーニックの最

初は、どういう活動だったのですか。

**大川** まず、私の勤務する会社の社長であり、理事長である古谷が先頭になって呼びかけ、平成15年に「WAOニセコ羊蹄再発見の会」を組織、まちづくりやシーニックバイウェイに関する講演会・フォーラムを開催、地域観光や町の魅力をみんなで見直し、発見していこうという、まさしく「再発見の会」のタイトルどおりの活動から始めました。ホスピタリティーの意識の向上や外国人とのコミュニケーション力のアップのための小さなセミナーを開催。次に、これまで観光客があまり見なかったような景観ポイントを探し、そこにテラスを作り、シーニックカフェを開きました。その集客のため、他の活動団体の企画で周遊バスを走らせてもらいました。

このような自分たちの地域の魅力を表現する企画を重ねることが、最終的には地域おこしビジネスや地域の人たちの自主活動につながればと思っています。

**林** シーニックカフェは、本当にすてきですね。いい景色のところとに設けられ、すごくおしゃれなパラソルもあって、反響もかなりあったのではありませんか。

**大川** そうですね。非常に面白い企画として、大成功だったと思います。



### 外からの視線と地元としての地域づくり

**林** それまではサラリーマンとして地域でお仕事をなさっていた大川さんが、WAOの活動をすることで、ご自身がニセコ再発見、羊蹄再発見ということがあったのではないですか。

**大川** 私の場合は、高校を出てニセコを離れて、



年に1、2度帰ることがあっても、実は腰をすえて地域を見ていなかった。帰ってからは、羊蹄山が時間とともに、そして日々変化していく様子が美しく、何と贅沢な風景なのかと、毎日感動しています。エリア外から改めて見て、今まで感じなかった良さを発見できました。

自然を楽しみに来る人と、普通に地域で生活する人とは、地域に対する価値感は大きく異なります。観光客に地域を楽しんでもらうこと。そしてそれが、地域の活性化につながっていく仕組み作りが大切だと感じます。単に観光で人を集めても、地域にとって本当に良いことなのか疑問です。  
**林** 2年目にシーニックカフェをなさって、3年目はどんな活動をされたのですか。

**大川** カフェを続けながら、今度は町の中をきれいにする花の活動です。ヨーロッパのように両サイドの家が通りに向かって花を飾るということを目指したものです。実際には、森づくりセンターという役所の山小屋風木造建物の壁を借りてラティス（薄い板材を格子状に組み合わせたもの）にお花を飾り、なんの変哲もない壁がこんなに変わるとデモンストレーションしました。農業高校の先生や生徒、町の人にお手伝いいただきました。

よい雰囲気や鑑賞する人が増えるとレベルが上がります。無理をしても受身ではうまくいきません。みんなが自発的に動かないと支援を受けても長続きはしません。また、自立して継続するには予算管理が必要です。そのへんはまだ知恵が足りませんが、うまく回してみんなにやる気を出させ、コストをかけないでレベルアップしていくことがとても重要です。

**林** そういう活動を続けていくことは、事務局としてはとても大変でしょうが、かなり大川さんの思いに近づいている感じですね。

### 課題はルートとしての共通イメージ

**大川** シーニックバイウェイという言葉だけが出てきましたが、じゃあそれが何かというところがまだ地域に浸透していない。シーニックのイベントはいろいろしていますが、支笏洞爺ニセコルートの具体的、視覚的なものがまだない。

アメリカでは、シーニックバイウェイルートと認識できる標識で意識付けができています。

**林** アメリカのシーニックをご覧になったのです

ね。どのあたりが一番印象に残りましたか。

**大川** システムが非常にしっかりできています。シーニックバイウェイの全体組織が企画して、キャンペーン・セールスをしており、そこにコーディネーターがいて、末端では地域ボランティアで時間的、経済的にわりあい余裕のあるおじいちゃん、おばあちゃんが地域をガイドする。バスで走る間に、地域の歴史と自慢のものを、誇りをもって教えてくれます。いわば観光大使です。ビジターセンターには有給スタッフがいて、お金のかかるところにはお金が十分に払われて運営管理されており、小さな活動団体にもうまく分業されているという印象でした。

**林** 支笏洞爺ニセコルート地域の皆さんの反応はどうですか。

**大川** このルートではまだデザイン的に統一された標識などの定義づけがありません。支笏、洞爺、ニセコ、それぞれの観光地という意識で、ひとつのルートとしてのイメージができていない。これからの課題は、このルートの共通イメージを出すことですね。

**林** 確かに、私も札幌生まれ札幌育ちで、何回も支笏や洞爺、ニセコに行っていますが、一連のルートという感覚はまだないかもしれませんね。



### ルートをつなぐ“キャンドルナイト”

**林** 皆さん方の活動では、ニセコについてどんなふうに魅力を発信していらっしゃるのですか。

**大川** ニセコの魅力は、元々は冬のスキーで、今は夏が増えて、秋の紅葉があり、春はスキーと外での遊びができ、四季折々を楽しめる通年型の観光エリアだと思います。

しかし、それ以外にも、静かに景色を楽しむ、山歩きでも単にルートを歩くだけでなく、古い歴史が残っているところや地元の人しか知らないすてきなところがまだまだたくさんあります。それを外へどう出していけばいいのか。キャンペーンがまだ足りなくて、ニセコのそうした魅力があまり外に伝わっていないのではないかと考えています。

**林** きっと私たちの知らないニセコの魅力を地元ではもっと感じていらっしゃるのですね。そのあ

たりは、ニセコや支笏や洞爺の活動団体の人たちと連携して勉強会や意見交換をしていらっしゃるのですか。

**大川** まだそこまではいいませんが、今年の冬は、初めて支笏洞爺ニセコのルート全体で連携したイベント“キャンドルナイト”を実施しました。支笏洞爺ニセコルートを明かりでつなぐイメージです。シンプルで多くの人参加しやすく、楽しんでもらったと思います。

ひとつのエリアでなく、シーニックルートを意識させることを心がけました。同じ日の同じ時間帯にキャンドルをともして、ルート全体を浮かび上がらせる。参加者に1本100円で買ってもらったキャンドルの代金の一部をキャンペーン費用にあて、少額で無理なく参加者に楽しんでいただきました。WAOと京極町景観を語る会、NPO法人洞爺にぎわいネットワークの3つの活動団体でスタートしましたが、最後は千歳からニセコまでの支笏洞爺ニセコルートの主な活動団体にもお手伝いいただきました。

そのための連絡調整やキャンドルの配達などで別エリアの活動団体との交流が非常に密にできたことも大きな成果だと思います。

**林** スノーランタンの写真をみるとロマンティックですてきですね。若い世代の方たちが楽しそうに火をつけてらっしゃいます。お星様やお月様の形もあって、すごくかわいいですね。どのくらいの方が参加したのですか。

**大川** 2日間で延べ800人から1000人ぐらいではないでしょうか。夕方の5時ごろから日没にかけて点火して4、5時間、明かりをともしています。

小さいスコップとキャンドルを渡して自由にしてもらおうと、最初は遠慮がちにですが、次第に大胆に雪と格闘しはじめ15分ぐらいで点灯していま



した。こちらから何も指示はしませんでした。

**林** 国際的にも人気の高いニセコなので、外国の方もずいぶんいらしていたようですね。

**大川** 声をかけると、皆さん喜んで参加してくれました。

反省は、ひらふスキー場は外国人が非常に多いので、英語のインフォメーションを事前に用意すべきでした。在住の外国人がととも増えています。外国人の新しいエネルギーも、これからの地域づくりに活用していくことも必要です。

**林** キャンドルはどのくらいとりましたか。

**大川** 2日間合わせるとルート全体で約2万本のキャンドルがとりました。今回はルートをつなぐという前触れをしたので、沿道をずっとキャンドルがともると思われた方もいました。それは残念ながら無理でした。

**林** 10年後ぐらいにはそれが可能になっているかもしれないですね。

#### 自分たちが楽しんで自発的に動くのが一番

**林** 小樽の「雪あかりの路」は、まちづくりに一生懸命な方が始めて、そのうちにおじいさん、おばあさんたちが家の前でキャンドルをともし、予想以上にきれいにしてくださるそうです。ですから、1回目で皆さんにイメージが伝わらなくても、2回、3回と続くと、地域の方もこれなら参加できて楽しいというふうになりそうですね。

**大川** うちのルートも幅広い層の人たちが、もっとたくさん参加するようになると、スタッフの力も出てくると思います。ノルマじゃなく、自分たちが楽しめて自発的に動くのが一番大切です。今回の企画には、いろいろな方が参加し、すごく楽しんでいただけたと思います。

**林** キャンドルも近所のお店で売ると、みんなが参加できて広がりますね。

**大川** 今回は、ルート全体で明かりが灯れば成功と思って、広いエリアをつなぐことを最優先しました。結果としては、なぜもっと広く知らせなかったのかとおしかりを受けるほど大きな反響でした。

#### シーニックによる連携効果

**林** 素晴らしいきっかけになりましたね。ニセコ、特に倶知安は豪雪地帯ですが、千歳は雪が少ない。そこで、改めて支笏洞爺ニセコルートはすごく長いルートだと気付きました。

**大川** 千歳から倶知安まで100kmあります。100kmの間で一緒にやるには、あまり大掛かりな仕掛けでは労力が大変です。今回は、中山峠、美笛峠の道の駅にも協力をいただきました。支笏湖は水濤まつり会場、千歳市内は雪が少なく、アウトレットモール「レラ」の協力を得てキャンドル広場ですてきなイベントをしました。千歳、支笏、洞爺、ニセコの羊蹄山麓一周の町村が一通り明かりをともすことができました。簡単な仕掛けで効果の大きい方法を見つけたと思っています。今回のイベントがなければ、多数のエリアが連携した共通の連帯感を持てなかったと思います。

**林** このキャンドルナイトをきっかけに、また次のことをみんなで考えようという機運ができたということですね。

**大川** そうです。洞爺、支笏の人たちと繰り返し会ってお互いの気心が知れると、支笏、洞爺はこんなことをして面白かった、それではうちもやろうとなる。これは大事なことですよね。

**林** ニセコ地区では元々、美術館ラリーや後志のスタンプラリーなどいろんな仕掛けを官民あげてやっているという印象がありますね。

シーニックは道路を切り口にしていますが、その効果はどうか。

**大川** 町村の観光協会や支庁など、いろいろ縦割りで行なわれていますが、シーニックは町域に関わらず活動できることがプラスの面です。支笏洞爺ニセコルートはすべて国道でつながっていますが、各エリア内間には道道が多く、スキー場エリア内などではさらに町道もあります。すてきな観光ポイントは意外と町道にあたりします。イメージする「道」が国、道、各町村にまたがると許認可が複数になり大変です。シーニックには、自然なきっかけで民間同士を活性化させる面白い効果があります。行政同士では敷居が高くても、民間同士は軽々とエリアを越え、レベルも上がっています。

**林** キャンドルナイトは民間の活躍での緩やかな広域連携の効果的事例としてうかがいましたが、シーニックが目指すものは地域の人たちの沸き立



つ力が進めていくものなのですね。

**大川** 翌年も来たくるように仕掛けも手直しする必要があるかもしれません。

### 帰ってきたくなる町、働ける町

**林** WAO理事長の古谷さんが企業経営と別にNPOを立ち上げて、大川さんを専従にして活動していることに私はすごく郷土愛を感じます。

**大川** 理事長の古谷には「将来自分たちの子供が帰ってきて働く場所もなく、魅力があると思えない町では寂しすぎる。帰ってきたくなる町、働ける町でなければいけない」という強い思いがあります。その思いはWAOの活動のもう一つの柱にも表れています。

それはエキノコックスの感染防止活動です。キタキツネの腸に寄生する成虫が産卵すると、キツネの糞からたくさんの虫卵が野外に排出されます。この卵を摂取すると、人の体内では、幼虫となり肝臓で増殖します。やがて重い肝機能障害を起こし死に至ります。キツネは影響を受けません。成虫を持ったキツネは、ほぼ全道に広がっています。駆除するには、道東の小清水町の実験で効果が実証された、月1回虫下し入りのえさをキツネに食べさせる方法があります。まず倶知安町域から始めました。キツネの糞を調査し、虫下し入りのえさを作り撒布します。効果を維持するためにも全道へ広げたいと考えています。「安全に遊べる地域環境は将来の子供たちへの最大の贈り物」と理事長の古谷は言っています。コストがかかるので、今年は、キャンペーン用のステッカーを販売して、えさ作りの費用に充てます。規模が大きくなれば官の仕事でしょうが、しばらくはいろいろな補助制度を使って虫下しの撒布を続けます。

**林** ちょっと意外な活動もされているのですね。「帰ってきたくなる町、働ける町」ということですが、大川さんの場合は倶知安に戻って仕事を探すのにかなりご苦労がありましたか。

**大川** 上の子供が小学校に入る機会にと、家族会議をして北海道へ来ました。今の会社に落ち着くまでに1年ちょっとかかりました。

**林** 大川さんのようにUターンや移住したい人たちのためにも、北海道にいろんな仕事場が増えるチャンスになるような地域づくりが重要ですね。

**大川** 外から観光業者が来て、事業を起こし、商売で儲けるだけでなく、自分たちも観光ビジネス

を取り入れ、地元の資力を高めないと、地元が疲弊します。地元が力をつけるアイデアを出して支援できればいいと考えています。

**林** 今の北海道にとって、地域にお金が回って、地域内できちんと働ける環境をつくるということはものすごく重要なことですよ。

**大川** 今はなかなか地域にお金が回らない。地域が元気になるには地域にお金が回ることが必要です。それもただ闇雲に落とすのではなく、どういう形にするのが非常に大事なところです。

**林** それを皆さんはある意味では実験しつつ活動していらっしゃるのですね。

**大川** 私たちの事業では、地域の声を拾うタウンミーティングで、地域の元気探しを定期的にやっています。

**林** いいお話をうかがうことができました。キャンドルナイトがより幅広く展開され、また、キャンドルナイトのようなルート全体を連携するイベントが春や夏、秋にもあるといいなと思います。ぜひがんばってください。

(本インタビューは、平成18年4月24日に札幌で行いました)

シーニックバイウェイ北海道  
<http://www.scenicbyway.jp/>



---

### profile

**大川 富雄** おおかわ とみお

高校まで倶知安で過ごし、大学から40歳まで東京・埼玉で生活。1998年に倶知安に戻り、'99年よりニセコ運輸(有)勤務。'03年同社社長(古谷理事長)がWAOニセコ羊蹄再発見の会を立ち上げ、設立時より事務局を担当。'04年12月NPO法人となり、'05年4月から事務局専従。シーニックバイウェイ北海道・支笏洞爺ニセコルートのニセコ羊蹄エリア事務局を兼務。

**林 美香子** はやし みかこ

1976年北海道大学農学部卒業。'76年札幌テレビ放送(株)入社。'85年同社退社後フリーキャスターとして活動。食・農業・地域づくりなどのシンポジウム・講演会にも参加。現在の担当番組エフエム北海道「ミカコマガジン」(日曜朝8:00~8:30)。「北海道文化財団」評議員、「北海道田園委員会」委員、「スローフード&フェアトレード研究会」代表、農林水産省「食と農の応援団」メンバー、「フォーラム・エネルギーを考える」メンバーなど公職多数。著書「ワーキングマザーの元気ブック」(北海道新聞社)、「楽々おかずとおやつ」(北海道新聞社)、「ハーブティを飲みながら」(共同文化社)。

---